

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2021年7月4日

文責：JUN

## 授業への思いと子どもへの思いを一つに、 それが「学び合う学び」

### 1 教室に足を運んだからこそ

「学び合う学び」は、単なる授業のやり方・方法ではありません。子どもの学び方という狭い枠から見てもなりません。そこになければならないものは、学び手である一人ひとりの子どもを尊ぶ「まなざし」です。その「まなざし」を有し、すべての子どもの学びのために行おうとするからこそ「学び合う学び」になるのです。

コロナ禍は、私の学校へ向かう歩みを止めました。教師たちの授業を見つめ、学ぶ子どもたちに向けるまなざしを眠らさざるをえなくしました。そしてそれは、教師たちと協同する機会と子どもたちと出会い触れ合うたのしみを私から奪うことになったのです。

私が居住する愛知県の緊急事態宣言と、私が訪問する学校数をもっとも多い三重県のまん延防止等重点措置が解除されたのは6月21日でした。その日を境に、奪われていた私にとってかけがえのない時間が戻ってきました。眠らせていた「まなざし」を目覚めさせることができるようになりました。それは、私に、授業の場、子どもが学ぶ世界が、どれだけ素晴らしいものであるかを改めて感じさせることとなったのです。

学校を訪問すれば、すべての教室に足を運びます。教室に足を踏み入れると、かかわり合う子どもと体の間に流れる空気の波のようなものが心地よく私に響いてきます。教師の言葉に引きつけられるように耳を傾けている澄んだ目、「どういうこと？」と考え込む思考する目、仲間の話を聴いていて何かにハッと気づいた瞬間の大きく見開かれた瞳、それらすべてが、私に子どもの学びの世界を感じさせるのです。毎日のように見えていたオンラインの授業においてもそれに近いものを目にしているのですが、やはり自らの感覚と意思で向けることのできる「まなざし」はちがうのです。

校長室で話しているとき、午後に行われるその日の特設研究授業（現職教育の授業研究としてその学校の全教員が参観する授業）について、校長先生がぽつっと次のようなことをおっしゃいました。

「授業をみていただく前に、話しておきたいことがあります。実は、この学級に、学習から外れがちになったり、友だちとトラブルになったり、とにかく落ち着いて座ってられない子どもがいるんです。担任はその子のことに心を砕いています。それだけになんとかよりよくしていきたいと思っています。ご覧いただいて教えていただくようお願いします」

昼休みでした。コロナ禍だということもあって、換気のために校長室の扉は開いていました。ふっと廊下に目をやった瞬間でした。1人の子どもがゆっくりと廊下を通り過ぎたのです。その子どもが、通り過ぎるとき、校長室の中をうかがい、私の顔をじいっと見つめたのです。

私は、はっとしました。なんとなく、その子どもがさっき伝えてもらった子どもなのではないかと思ったからです。私は、「あの子……？」と言いながら校長先生に目を向けました。校長先生はうなずき、「あの子です」とおっしゃいました。

そのとき、私は直感しました。彼は、自分を受け入れてくれる人を求めているのだと……。

彼は、担任から、何人もの先生が授業を見に来ること、その中に、石井という遠くから来る先生がいることを聞いたのです。その時、石井先生ってどういう人だろうと思ったのです。つまり、彼は、校長室まで偵察に来たのです。それは、私の教師としての経験から言えば、上記のような思いを抱いているからにちがいないのです。この子は、寄り添えば必ず学ぼうとするようになる、そう思いました。

研究授業の時間になり教室に向かいました。いつものように、前の扉から教室に入り、置いている椅子に腰かけました。目の前の扉に近いいちばん前の席が空席になっていました。そこがあの子の席です。あの子がいない、どうしたのだろう？と思って見回したそのとき、彼が勢いよく教室に戻ってきました。そして、後ろの席の男の子に話しかけ、そそくさと座りました。そして、ちらっと私の顔を見たのです。

授業は、算数でした。先生から課題が出されました。その課題を考えるための基本的な知識を尋ねる発問が出ました。すると、彼が手を挙げたのです。うれしいことに、何人もの手が挙がっていたにもかかわらず、先生は彼を指名しました。こうして彼は、序盤で学びのペースに乗ることができたのです。

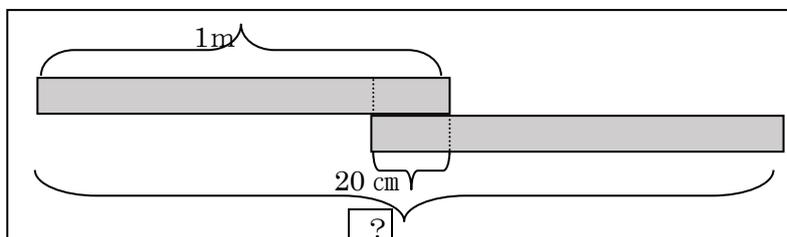
やがて、グループで考え合うことになりました。子どもたちは机をグループの形に並べます。私は、彼がグループでどう考え合うのか聴こうと思って立ちあがりました。立って行って聴こうと思ったからです。そのときでした。彼が、私のほうを向いて、「ここへ椅子を持ってきたら」と言って、彼のすぐ横を指さしたのです。「おおっ！」と思った私は、「ありがとう」と言って、彼のすぐ近くに座ったのでした。校長室で感じた私の思いは、もう確信に変わりました。

子どもたちは、それぞれでタブレットに自分の考えを書きこんでいました。グループでは、その考えを擦り合わせて考え合うのです。1人の子どもが自分のタブレットの画面をみんなに見せて説明しようとしていました。すると、彼は、説明しようとしている子どものタブレットの周りに、自分のタブレットを並べるように近づけ、それだけでなく、ほかの2人のタブレットもその近くに集めたのです。

相談することも同意を求めることもありません。自分の気持ちで彼は突っ走ります。けれども、

グループの子どもたちにいやがる様子はなく、この彼の行動を受け入れています。独断的な行いは、確かに彼の他者関係を難しくすることになるでしょう。相手の思いを慮るという回路が足りないからです。けれども、彼がしたことは、4人の考えを一つの所に集めて、それを見ながら考えようということであり、協同的学びの観点から見てよいことです。つまり、思い立ったら独断専行的に行動してしまうけれど、仲間とかかわり合っていこうという意識があるということは、今後の可能性につながります。

彼が、先生の問いに対して手を挙げて答えました。うれしいうれしい瞬間でした。ただ、答えたことは正解ではありません



でした。右上の図の二つの1 mが重なっている部分をどう考えれば左から右までの長さが計算できるかという問いに対して、彼は、「40cmを引いたらいい」というように述べたのです。

それを聴いた私は、またまたうれしくなりました。この彼の「間違い」は、重なりのある長さを求める学びにおいて、「学びのツボ」に当たるところだったからです。彼は、二つの1 mそれぞれに20 cmがあるわけで、だから40 cmと考えたのです。この間違いは「宝物」です。それをこの子が出してきた、ほんとに素晴らしいと思いました。

授業が終わりました。私は、やおら立ちあがって、何人ものその学校の先生たちに混じって教室を後にしようと思いました。そのとき彼は、隣の子と何か話していました。何か彼に一言言って帰ろうと思っていた私にはなんとも間の悪い感じがしました。私は、彼の肩をなでるようにして、「よかったよ」という無言の思いを伝えて教室から出ました。去っていく私に視線を向けてくれなかった彼。隣の子と夢中で話していた彼。それは、むしろ喜ぶべきことなのです。

このドラマは、教室に足を運んだからこそ生まれたものでした。オンラインでは決して生まれることのないものでした。「学び合う学び」は、どう授業をするかということだけでは成立しないのです。授業をどう行うかとともに、そこに一人ひとりへの子どもへの思いがあり、それが一つにならなければ「学び合う学び」にはならないのです。その子どもへの思いは、生身の教師と子どもとの触れ合いがなければ生まれてこないのです。どれだけICT化が進んでも、実際の人と人との触れ合いをなくしてはならないと言われる所以はここにあります。

## 2 先生たちとの触れ合いも

学校に足を運ぶことによって生まれる「触れ合いの大切さ」は、子どもに対してのことだけではありませんでした。

これはまた別の学校でのことです。

特設研究授業についてのその学校の全教員による協議会が終わったのは午後4時半でした。

よく考えられた課題だったし、子どもたちがよく学び合ったこともあり、協議も重厚なものに

なりました。オンライン続きだった私には、この充足感は久しぶりに思えました。ところが、私の感じた充足感はそれだけでは終わらなかったのです。

協議会を終えた私は、学校長とともに校長室に戻りました。いつもなら、そこで少しの時間話を交わして、今後の日程を確かめたうえで帰らせていただく、それが通常でした。ところが、その校長室に、特設授業をした教師をはじめ、何人かの先生方が入ってこられたのです。こうして始まった懇談？は、特設授業のことに留まらず、話のつながるまま次々と続いていきました。そして、ふと気がついて時計を見ると、時計の針は6時過ぎを指していました。知らないうちに、1時間半も語り合っていたのです。

帰路の車中、運転しながら私は思いました、コロナ禍でオンラインでしかできなかった間、先生たちも飢えていたのだと。子どものこと、授業のこと、教材のことを語りたかったのです。聴いてほしかったのです。何らかの手掛かりを欲していたのです。それが、堰を切ったようにあふれ出たのです。それも、私が学校に足を運べたからこそ生まれたことでした。そして、そうしていなかったら、先生たちのその思いも満たされていなかったのです。

昨日、何日か前にオンラインで特設研究授業だけ参観した学校に出向きました。なぜ、オンラインを特設だけにしたのかというと、一つひとつの学級の参観は、直接訪問ができるようになってからにしてほしいという要望があったからです。それは、やはり生で見てコメントしてほしいという先生たちの思いに沿うためだったのです。

宣言解除によって、その訪問が実現しました。そうしたところ、特設授業による協議会が必要ないということから、休憩時間、子どもたちが帰ってからの放課後の時間を活用して、一人ひとりに話をしてほしいということになったのです。

こうして私は、17人の先生と、個別に話をすることとなりました。いえ、話をしたというより、それは対話的なやりとりになりました。私がとらえたこと、感じたことは、それぞれの教師の思いとか事情とかと突き合わせる形で話すことになったのです。

この学校を訪問するようになって4年目になります。けれども、こういう機会はこれまでありませんでした。私は、すべての先生と、個別に懇談するということの大切さとよさを心から感じました。外から見ているだけではわからないことがあるのだし、先生方にはそれぞれの考えや悩みがあるのです。それを知らないままの私の言葉は、もしかすると十分な効果を生まないのではないか、そう思ったからです。

考えてみれば、コロナ禍に陥らなかつたら、そう気づくことはなかったかもしれません。コロナ禍は大切な気づきをもたらしてくれたと考えることができます。そして、何よりも、逆説的になりますが、コロナ禍によって、学校に足を運ぶことの大切さがはっきりしたのです。そんなお土産を残して、少しでも早く収束してくれれば、そう願うばかりです。

## == 2つのお知らせ ==

- ◎ 石井順治著『続・「対話的学び」をつくる～聴き合いとICTの往還が生む豊かな授業』（ぎょうせい）  
7月10日に刊行。購読希望の方に葉付きでお送りします。（後日、案内します）
- ◎ 「第22回授業づくり・学校づくりセミナー」の受付を開始しました。